

弘法大師御遺告

蛭沼, 芽衣
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/25262>

出版情報 : 文献探究. 48, pp.1-, 2010-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



弘法大師御遺告

賀能大夫達向者歸國惟延曆
 廿四年電持也即配大德貞元廿
 一年也爰小僧并攝大夫兼勅
 一留學具在別記即小僧過上都長
 安青龍寺大德內供奉寸碑
 所惠果大河閣垂沐五智灌頂
 學胎藏金剛兩部秘密法及
 讀時屢述卅金剛頂經等二百
 餘卷并諸新譯經論唐梵合存
 小僧以大同二年歸我本國此間
 海中人去日本天皇崩之聞諫
 是言尋奉口言般內諸人論筆
 首尾亦不一之注繫著岸或人
 言告天皇其日時崩者小僧懷

勅告具在別記即小僧過上都長安青龍寺
 大德內供奉十禪師惠果大河閣契沐五智
 灌頂學胎藏金剛兩部秘密法及讀毗盧遮
 那金剛頂經等二百餘卷并諸新譯經論唐
 梵合存小僧以大同二年歸我本國此間海
 中人人云日本天皇崩之聞諫是言尋奉口
 言般內諸人論筆首尾亦不一之注繫著岸
 或人言告天皇其日時崩者小僧懷悲給素
 服從爾以降帝經四朝奉為國家建壇修
 灑五十一箇度亦神泉園池邊御願修法祈
 雨靈驗具明上從殿上下至四元此池有龍
 王召言知元是無雙達池龍王類有慈為人
 不至害心以何知之御修法之比託人示之
 即致真言真旨從池中現形之時悉地成就
 彼現秋業宛如金尾長八寸計地此金尾地
 居在長九尺計地之頂也見此現形弟子等

解説

蛭沼芽衣

弘法大師の遺告とされるものは「諸弟子遺告」と呼ばれるもの、「遺告真然大徳等」と呼ばれているものなど、数種類あるようであるが、これは「二十五ヶ条御遺告」と呼ばれるものである（以下「御遺告」と略す）。「大正新修大蔵経」七十七卷（二四三二）にも収められているが、九州大学文学部所蔵本（口絵上段）『御遺告』にある「或本奥云」（四八丁オモテ一行目）以降は「大蔵経」には見られない。

『御遺告』は、二十五ヶ条から構成されており、第一条で弘法大師の略歴を述べ、第二条以降でさまざまな戒めを説いている。他の「遺告」諸本は高野山の寺領拡張の正当性を主張しているが、『御遺告』では、東寺中心主義を標榜した内容となっている。『御遺告』は、真言宗教団内で重要視され、弟子・門徒以外の承伝を固く禁じているが、偽作であるとの説が定説となっている。その第一点として、弘法大師の文章としては拙劣であること、第二点に歴史的事実と異なる事象があることなどが挙げられている。

九州大学文学部所蔵本『御遺告』（口絵上段）は、縦一八・一cm×横一五・五cm 粘葉枳形本、箱書に「平安朝末期写」とあり、本文中の仮名点の字体より、院政期までは遡れると思われる。角筆で界線が引いてあり、七行、四十九丁ある。朱書きで平己止点・仮名点が、墨書きで仮名点が付されている。平己止点は東大寺三論宗点が使われ、下の図のような点が見られる。

また、圏点によって声点が表してある。例えば口絵一行目「達」に「入」、四行目「留」に「平」とみられるものなどがそれである。声点が付されている字は全部で五十八字あり、その半分以上が最初の十丁に集中している。また、二〇丁ウラの「決」に「サクリ（上上濁平）」、四四丁表の「淡」に「アハチ（上上平）」と、和訓にも声点が付されているものが二箇所ある。

九州大学図書館には、支子文庫にも『御遺告』が所蔵されている（口絵下段）。こちらは室町時代中期写となっており、墨で界線が引かれ、一丁に二十一行、二十一丁あるが、文学部蔵本の約六丁分にあたる冒頭の部分が欠落している。また、これも文学部蔵本の「或本奥云」以降は見られない。点は全て墨書きで、平己止点はなく、返り点と声点が振ってある。声点の振られている字は文学部蔵本で振られている字とは異なり、同じ字に振られている場合でも、文学部蔵本と支子文庫蔵本で声調の異なるものがある。例えば文学部蔵本十一行目「崩（平軽）」と支子文庫蔵本六行目「崩（去）」などがそれである。

（ひるぬま めい・本学大学院博士後期課程）

